

令和6年度 文学部 歴史学科
学校推薦型選抜 総合問題

○解答例

1

(1) 本州北部が日本の飲茶文化に組み込まれたことは、江戸時代の大きな成果の1つであった。この日本の茶文化の拡大には2つの波があった。1600年代、商人は東北地方の住民に向けて莫大な量の茶を出荷した。どうやら、茶を試飲した東北地方の人びとは、好みに合っていると感じたようである。その後、1700年代から1850年にかけて、同地の人びとは、不利な気候にもかかわらず、東北地方で茶を育てることを学んでいった。すなわち、東北地方の住民たちは貴重品と交換して茶を得ることにうんざりし、自給化（輸入代替）を進めたのである。1600年代の交易が茶ブームの時代を示していたように、東北日本の多くの地域での茶栽培の開始と普及は、18世紀から19世紀の農村産業の進歩を象徴した。

(2) 18世紀にはイギリスの貴族社会で喫茶文化が広まっており、イギリス東インド会社が中国からの茶の輸入を独占していた。1780年代になると、産業革命を機に労働者階級にまで喫茶が広がり、イギリス国内で紅茶ブームが起こる。イギリスは清から大量に茶を輸入するに際して銀で支払ったため、清へ大量に銀が流出した。そのため、銀の回収のため、インドでアヘンの材料となるケシの実を栽培し、アヘンを中国に送付し、銀がインドに行くようにし、インドとの綿貿易で銀がイギリスに回収できるよう、三角貿易をおこなった。清はアヘンの取り締まりを行ったが、イギリスは自国の貿易と商人の保護を口実に、清との間でアヘン戦争（1840年～1842年）を起こした。戦争後、香港島の割譲、賠償金2,100万ドルの支払い、広州、福州、廈門、寧波、上海の5港開港、貿易の独占廃止を定めた南京条約が結ばれた。

- (1) 歴史の父ヘロドトスは『歴史』の巻頭でその目的を明記して、ギリシア人と異邦人（バルバロイ）の数々の行動の記憶を保存するため、「また何よりも相互に戦った原因を示すため」であるとしたためました。古代世界においてヘロドトスの弟子といえる者はほとんどいませんでした。トゥキュディデスでさえ、因果ということについて明快な考えをもっていなかったと批判されてきました。ようやく一八世紀に近代の歴史叙述の基礎がすえられ始めたころ、モンテスキューが『ローマ人の偉大さ、および興隆・衰退の諸原因考』を著しましたが、その出発点においた原理は、「あらゆる君主政において精神的・物質的に（文化や自然にかかわる）一般的な諸原因が働き、これが君主政を育て、維持し、あるいは転覆する」、そして「すべての出来事には、こうした諸原因がある」というものでした。その後『法の精神』でモンテスキューはこの考えを発展させ一般化しました。

- (2) 『法の精神』は1748年発刊の、フランスの啓蒙思想家・モンテスキュー Montesquieu (1689-1755) の著書で、各国への旅から得た資料で、諸国の政治・法体制を歴史や習慣風土など国ごとの条件を検討しつつ考察し、とりわけイギリスをモデルに三権分立 Separation of powers を説いた。これはロックやモンテスキューにより体系化された、国家権力を立法・司法・行政の三つにわけ、異なる組織に執行させる制度で、組織相互に牽制しあい均衡を保つことで、権力の集中や独裁・王権の制限をねらいとする。アメリカ合衆国憲法においてはじめて成文化された政治原理となり、フランス人権宣言にもとり入れられた。